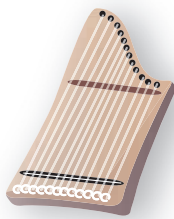


連載 ヘルマンハープ物語 第5章

日本ヘルマンハープ振興会会長・ヘルマンハープ奏者

梶原^ち千^さ沙^と都さん(55)

日本ヘルマンハープ振興会

検索

人の垣根を越えて
広がっている

専用の楽譜に描かれた記号にそって、流れるような指先で弦を弾く、梶原千沙都さん。ドイツのバリアフリー楽器「ヘルマンハープ」を普及するために、先頭に立って演奏し、人に教えるなかで独自の奏法にたどりついた。そのプロセスは、開発者のヘルマン・フェーさんに至る道でもあった。

(文 赤坂志乃)

Text by Shino AKASAKA

楽器の欠点^{てんかん}が本質だった

梶原さんは、2007（平成 19）年に夫の彰さんに経営をバトンタッチした後、全国で教室を立ち上げ、年間 3000 人の受講生を教えるようになった。多くの人に接するうちに音色だけでどんな弾き方をしているのかわかるほどになった。

教室を見学に来た楽器店の社長から「あなたの教え方を書いてまとめなさい」とアドバイスされて、書き出してみたら膨大な量のメソッドになっていた。「自分でも驚きました」と梶原さん。

ヘルマンハープは誰でも弾けるけれど玩具ではない。人を感動させる本物の音色を持っているという信念があった。「ヘルマンハープにはどんな可能性があるのか」。ヒントを与えてくれたのは、意外にも他の楽器の奏者から聞こえてきた「ヘルマンハープとは合わない」という批判的な声だった。

最初は耳を貸さなかった。でもある日、なぜダメなのかきちんと聞いてみようと思った。

「原因の 1 つは、ヘルマンハープは音が小さいこと。それから残響が長いのでリズムを合わせにくいのだと気づきました。そこでハッと飲みこめたんです。この 2 つは、フェーさんがダウン症の息子



日独修好 150 周年記念で開かれたヘルマンハープ演奏会＝ 2010 年、兵庫県立芸術文化センター大ホール（日本ヘルマンハープ振興会提供）

アンドレアスさんのために工夫した、ヘルマンハープの特性^{てんかん}だったんです」

音量が小さいのは癲癇^{てんかん}を起こす心配がなく、優しく音色に癒されるように。音の余韻が長いのは、障害のある人がゆっくり弾いても大丈夫のように。ダメだと言われた欠点がヘルマンハープの本質だとわかった時、演奏したり教えてきたりした経験が一つに結び付いた。

導き出した奏法

「どうすれば芯のある音色を出せるのか、余韻を調節できるのか。ハープが教えてくれました。私が音楽の専門家ではなかったから既存の音楽理論にとらわれず、ヘルマンハープの本質を見て、規則性を発見できたのだと思います」

ハープと対話を重ねて導き出した奏法は、楽器の秘めた芸術性を目覚めさせた。メソッドが確立されていなかったドイツでも「音色を一変させる奏法」と絶賛された。

2012（平成 24）年にまとめられた「ヘルマンハープの奏法（基礎編）」（音楽之友社）は健常者だけでなく障害者にも愛用されている。その中にはドイツのフォルクスリート（愛唱歌）が数多く掲載されている。

「もともとヘルマンハープは、発語が困難なアンドレアスさんの声となり、愛唱歌を歌う楽器として誕生したんです。私自身ドイツにいる頃、子どもが幼稚園で習う愛唱歌を聞いて、音楽性の高い美しいメロディーに感動していました」

梶原さんは高校時代に音大を進められたほどの美しい声を持っている。親に反対されて諦めたが、ドイツでは町の市民合唱団で歌ってきた。

民衆とともにある

ドイツ・バイエルン州にあるフェーさんの農場で「ヘルマンハープ 20 周年コンサート」が開かれた時、夫の彰さんの演奏で日本の唱歌を歌った。その歌声を

聴いたフェーさんは、「ヘルマンハープで歌うように」梶原さんに強く勧めた。

「ただし、オペラ歌手のように歌ってはいけない。聞く人がヘルマンハープを遠い存在に感じてしまうからと言い渡されました。それは民衆の心と共にあるフォルクスリートにもつながっています」

梶原さんは、障害者と健常者が共に奏でる「バリアフリーステージ」を積極的に行い、演奏によりそう「ヘルマンハープ歌手」として日本やドイツの唱歌を歌ってきた。

「フォルクスリートは明治の初めに『ちょうちょう』や『かっこう』のように歌詞を変えて導入され、日本の近代音楽の血脈になりました。そして今再び豊かな高齢社会、共生社会に向かおうとする日本にヘルマンハープという音楽文化がもたらされ、人の垣根を越えて広がっていることには大きな意味があるように感じています」（おわり）

コラム

子どもの背中⑤完

Text by Mariko KATO

恥ずかしながら私は、誰でも志を持ってコツコツと努力すれば、それなりに夢が叶うと勘違いしていたのだろうか？幸運にもアナウンサーという自分が志した道に入り、広島のリポート放送で 13 年間、思う存分働かせていただいた。RCC 最後の仕事は、8 月 6 日原爆供養塔からの全国中継。「お名前がわかっていながら、引き取り手のない遺骨が眠っています」。この事実をしっかり伝えなければ、心中納まらなかったことを覚えている。

15 年前、ダウン症のある一人息子が生まれ、人間には、その人がどんなに努力しても不可能なこともあることを痛感している。自分ではどうすることもできない障害があり、どんなに頑張ってもできない状態にある時に「何でやらないんだ！」と脅されることほど、残酷なことはない。

山口県下関市の障害者施設で、顔を平手打ちされ、暴言を浴びる知的障害者虐待の TV 映像を、怒り震える思いで見ていた親は私だけではないだろう。

いったい何時の時代の事件だろうか？逮捕者だけ、この施設だけが抱えている問題だろうか？障害のある人たちのために、一生懸命尽くして下さっている職員の皆さんの努力まで踏みにじる行為だと思う。

自らの意思を伝えることが苦手な弱い立場の人たちが、ストレス発散の標的になってはならない。私が住む奈良に初めて開設された＜ことばの教室＞の故・山崎泰男先生は、軍隊生活の中で「言葉に障害を持った人が虐めに会い、悲惨な

死に方をしていった」事実を見て、子どもたちのために言語治療教室の必要性を感じ奔走されたと聞いている。過ちを、繰り返してはならない。親亡き後の安心のために、福祉現場の人たちが夢を持って働ける環境作りを切に願っている。

(アナウンサー 加藤万里子)



渚の風

1 年号

なぎさのかぜ
2015年7月30日 (Thu.)
発行 (株)産経新聞制作



2面 日本のリーダー
「社会の動脈になる」
全国社会福祉法人経営者協議会新会長
いそ あきただ
磯 彰格さん(55)



6-7面 特別企画 緑陰インタビュー
「政治と福祉とファッションと」
よし か
伊藤良夏さん(35)
社会福祉法人 幸幸福社会 理事長
大阪市議会議員
元ファッションモデル

休刊によせて

いのちを想いながら

渚の風、という新聞を創るために、ほんものの渚を見たい。そんな高ぶりの中で、ボストンから特急列車に飛び乗った。2013年夏、米国メイン州の海辺のまちに、レイチェル・カーソン海浜自然園が広がっていた。

入り口にある管理小屋。その壁に、どちらかというとも無造作に張られていたポスターのなかで、彼女は微笑んでいた(写真)。Rachel Louise Carson (1907-1964年)。「沈黙の春」を著して世界で初めて「地球の悲鳴」(環境汚染)を伝えた海洋生物学者、そして作家である。

小屋は、森の中にあった。小道が、森の奥へと続いている。歩き始めてすぐ、川が視界に入ってきた。その向こうに、青い海原と白砂が望める。遠いので、ただ輝いているだけ。でも、潮騒の音が聞こえてきた。

木々の葉っぱが、風に揺れる。木漏れ日がまぶしい。足もとを何かがかさっと走った。子リスだった。いろんなものが、一体となっている。

さらに歩いた。小道の土手が崩れていた。泥が流れだし、その下の川は茶色に濁っている。7、8年前のハリケーンの爪痕。でも、そのまま。修復もしない。濁った茶褐色の帯が、海をめざしてうねっている。

それが、渚の現実。どこまでも、ありのまま。美しいばかりでなく、醜さもある。カーソン女史は、幼い甥のロジャーを連れて、森と川と海と空がぶつかる、渚を歩いた。森や浜辺や夜の海はロジャーにとって、驚きの宝庫だった。

<「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要でない>

あの、名著「センス・オブ・ワンダー」(神秘さや不思議さに目を見張る心)の一文は、ロジャーと散歩した「渚の時空間」から生まれていた。

感度のいい新聞に。そして、誰もが仲間の、ありのままを大切にしたい新聞に。そんな学びを得て、昨年夏、渚の風はデビューした。季刊紙だが、風は、少しずつ吹き始めた、と思っている。「創刊1年の歩み」(24面、25面)をまとめながら、みなさんの、熱い想いを感じた。



7月10日夜、大阪市天王寺区の喫茶室。上野谷加代子さん(写真)に、著書「たすけられ上手 たすけ上手に生きる」について取材した時のことだ(15面に書評)。「赤ちゃんの時は、たすけられるほうが多い。でも、赤ちゃんも人をたすけている。『この子を見殺しにしてはいかん』という想い(価値)を生み出している。存在そのものが、社会をたすけている…」

なんという感性、いのちへの感度なのか。世の中で起きていることは、みんな価値がある。感性が豊かであれば、それに気付くことができる…そんなメッセージに受けとれた。上野谷さんの言葉が、「知ることは感じることの…」のカーソン女史の言葉の「深奥」につながった。

創刊2年目での休刊。でも、私たちは、渚の風の光彩を、いつまでも大切にしたい。不思議がる心を磨きながら。そして、いのちを想いながら…。

渚の風編集委員会 平田篤州

渚の風 休刊のお知らせ

渚の風は、今回の第5号をもって休刊することとなりました。ご支援、ご愛読、まことにありがとうございました。

(株)産経新聞制作／渚の風編集委員会



Princess Photo
洗礼式

白でコーディネートされた、エレガントなファッション。キャサリン妃に、だれもが目をはうばわれた。英東部のノーフォーク州サンドリンガムの教会で7月5日に行われた、シャーロット王女の洗礼式。ご一家は、離宮から歩いて教会へ。新しい「いのち」に、祝福の輪が広がった。(写真：代表撮影／ロイター／アフロ)